『國民新報』1939年4月16日

朝鮮靑年と愛國心

國民になくてならぬものはだが、ことににして、のないのは、であつて、まことに恥づべきだ。

のもましいは、の、のため、きよいをげることで、の軍人として、にることは、青年として、このもないであり、であり、である。特をして、たしめたのは、にの[だ]。

　しかしは、ずしものにいてばかりではない。本當にを持つて居るものなら、その人の日常生活の、いづれもの現はれでないものはないである。が、そのにおいてをるるには、そのはへ、にびるのであるが、のなしにはのももないのだ。のためとか、のためとかつて、をれして、があるくおもふのはひである。

　それならとはなんであるか。それはをがとふことであり、我が、我がと思ふことである。このはを我がとひまつり、へまつることである。のが、のにいてのをへるそのなのである。とととにれるびこそ、ののなのである。それはにのみられたびではない。ににきるものは、でも、そのやがであらうとも、そのの一は、ささやかなるをしげととのに、このをりますという云ふことでなくてはならぬ。

ところがのはいかられたをしてつた。がしつかりがとなつてない。をれてものもないとふのがだい。これではいけない。ここにのながある。二千三百萬のをば、のをするき、あるのにげるのは、にのなるなのだ。いやしくもともあるものは、しくしなければならぬではないか。きをて、日本をしつかりときしめよ。たとひにるでも、をつてにつでなくてはならない。